学部ゼミナールでいかに学習成果を高めるか

報告者
高杉　　直（同志社大学　法学部　教授）
安達　太郎（京都橘大学　文学部　教授）
矢野　修一（高崎経済大学　経済学部　教授）

コーディネーター
西野　毅朗（京都橘大学　教育開発支援センター　専任講師）

参加人数
54名

近年、アクティブラーニングの導入や促進が叫ばれるが、教員と学生同士の緊密な対話によって学習成果をもたらす「ゼミナール教育」への言及は必ずしも十分とはいえず、その実践もブラックボックス化している。
本分科会では、人文･社会科学領域の豊かなゼミナール教育実践報告を基礎としたパネルディスカッションと参加者同士のグループディスカッションを通じて、より良い学部ゼミナール教育の在り方を模索する。

〈第５分科会〉

学部ゼミナールでいかに学習成果を高めるか

分科会のねらい

近年、アクティブラーニングの導入や促進が叫ばれるが、主に講義科目の改善を目指したものであり、旧来より学生の能動性を尊重してきた演習科目はあまり注目されていない。しかし、特に人文・社会科学領域においては、日本の高等教育の草創期からアクティブラーニング型の授業である「ゼミナール」を学部教育に導入し、教員と学生の親密な対話を通じて学生の全人的な成長を促してきた。

2012 年の全国教員調査においても、汎用的能力の修得や、態度・志向性の修得において８割以上の教員がゼミ・研究室単位の教育の有効性を認識していることが明らかにされた。しかしその教育方法や内容は講義科目以上に各教員の自由に任され、ブラックボックス化している。各教員は自身が受けてきた教育を下支えとしながら、目の前の学生と対峙する中で、独自の工夫を重ね、ゼミナール運営方法を磨いていると考えられる。また初年次教育や、ＰＢＬ、高大接続、学士課程全体の質保証など様々なテーマと結びつくこともあり、１つの科目としての枠を越えた可能性を秘めていると推察される。第 22 回ＦＤフォーラムの全体テーマは「大学の教育力を発信する」に鑑みても、日本の学士課程教育が古くから大切にしてきたゼミナール教育に改めて焦点を当てることは重要と考える。

本分科会では、各教員が学士課程教育の中でゼミナールをどのように位置づけ、具体的にどのような実践を行い、いかなる課題にぶつかり、それをいかにして乗り越えているのかを「第Ⅰ部:事例報告」「第Ⅱ部:パネルディスカッション」「第Ⅲ部：グループディスカッション」の三部構成で考えることとした。尚、本報告では第三部は割愛している。

第Ⅰ部：事例報告の概要

第Ⅰ部では、コーディネーターからゼミナールの定義や分類について整理し議論の土台を作った上で、人文社会科学領域で実際に学部ゼミナール教育を実践されている先生方からご報告いただいた。報告者には法学部、文学部、経済学部からそれぞれ一人ずつ、特にゼミナール教育に対し熱心に取り組まれている先生をお招きした。各先生には 25 分程度、各々の実践についてご報告をいただき、５分程度事実確認としての質疑応答を行った。

オープニング

各報告に先立ってコーディネーターから本分科会のねらいや概要について説明した。日本のゼミナール教育の発展過程に関する研究に基づき「学生－教員間及び学生－学生間の緊密な対話によいって知識･技能･態度を総合的に育成することを目指す少人数教育」とゼミナールを定義した。また、ゼミナールが演習科目に位置づくことや、教養ゼミナール、プロゼミナール、専門ゼミナールに分類できることも説明し、続く報告の位置づけを明確にするための土台とした。

高杉先生のご報告（法学部の事例）

高杉先生からは、「能動・共感・感興を目標に（法学部の事例）」という副題で専門ゼミナールのご実践内容をご報告いただいた。先生は国際ビジネスに関する法律問題をテーマとしてゼミナールを展開されているが、その目標は単なる知識・技能の修得だけではなく、彼らの主体的な行動を引き出し（能動）

他者への思いやりの心を持ち（共感）学問への関心を惹起する（感興）ことを目指されている。

能動性を引き出す最たる方法として競争意識が働くディベートなどのゲームを積極的に取り入れていること、共感性を引き出すために読書紹介やグループでの課外活動を取り入れていること、感興性を引き出すために研究や専門的な教育プログラムへの参加をされていることなど、各目標を達成するための様々な工夫が用いられていた。

一方でこうした教育効果を高めるために先輩後輩関係を活用したいが、自身が学生だった自分のようにエンドレスでゼミナールを行うこともできず、科目単位で授業をしてしまうため先輩後輩が共に学ぶ時間が作れないことに苦悩していること、ゼミの目的が何か、何を目指すべきなのかについては未だ悩み続けていると、自身の課題を提示して締めていただいた。

安達先生のご報告（文学部の事例）

安達先生からは、「いかにして学生から声を引き出すか」と題して文学部における１・２年合同プロゼミナール「言語文化総合演習」の実践をご報告いただいた。3，4年生に対する専門ゼミナール教育の中で、学生の発言の少なさや、おもしろい発表をしようとする意欲の欠如が目立つようになり、1，2年次から積極性や、意欲的な学びを引き出す必要性があるとの認識が教員間で共有されたことから本科目の開講に至ったとされる。

自由に自らのテーマを設定し学ぶ専門ゼミとは異なり、言語文化総合演習では自由選択方式の教育ではなく、押しつけ型の教育を敢えて意識し、食わず嫌いを減らすことを意図して必修科目化されている。押し付けとはいっても、そのコンテンツは文学、語学、歴史、地理を総合したコンテンツを提供し、学外に出て２コマ続けて学ぶ等、学生の興味関心を引き出す工夫がなされている。学内でする場合でも、ビブリオバトルや歌合、群読やリレープレゼンなど学生参加型の教授法が取り入れられており、グループワークや人前で話す力を鍛えられるように授業設計がされている。

本科目を履修した学生がようやく2016年度に3年次を終了するが、例年に比べて積極的に行動したり、発言する学生が増えており、教育目標を達しているように見られる。ただし、学年の特性である可能性もあるため、引き続き学生の様子を観察しながら改善に務めていきたいと締めくくられた。

矢野先生のご報告（経済学部の事例）

矢野先生からは、「ゼミナール活動を通じた「出会い」の場の演出―「不安」と「不満」を抱える学生を前に―」と題して、経済学部における専門ゼミナールの事例をご報告いただいた。

先生のゼミでは、第一に大学への帰属意識（誇り）を学生に持ってもらうことが目指されている。それは大学に入学してくる学生が必ずしも第一志望ではなく、不満や不安を持っていることに起因している。彼らに、高崎経済大学に入学して良かったと思ってもらうことが一つのゼミの成果とされる。第二に、出会いを提供することを目的としている。これは、「人」「新しい考え方」「自分」という三者との出会いであり、出会いを通じて、不安や不満を持つ学生を成長させることが目指されている。

具体的な教育活動は「原書講読」「就活文庫」「ＴＯＥＩＣチャレンジ」「高大コラボゼミ」「他大学合同ゼミ」「進級・卒業論文」「ポシビリズム研究会」等多岐にわたっている。いずれも学生のモチベーションを引き出し、学外との人間関係や、卒業生との人間関係を大切にして教育資源として活用されている点に特徴がある。

ゼミ運営の課題としては、活動費をいかに捻出するかが挙げられた。積極的に活動を推進しようとするほど、必要資金も増える。学内の様々な予算を活用しつつ、各イベントで活動費を蓄積し、学生に還元するような仕組みを整えることの必要性が語られた。

報告の整理

昼休憩を挟んで、午前の報告の整理をコーディネーターが行った。

第一に、ゼミナール教育を実践するにあたって学生の特徴を考慮することの重要性が挙げられた。それは大学全体としての学生の特徴であり、あるいは学部全体としての学生の特徴であり、最終的には個々の学生の特徴にまで及ぶ。

第二に、ゼミナールの目的が知識や何々力の修得ということ以上に、意欲や意識の変容、そして他者や

学問との向き合い方、ひいては物事の見方としての「観」をつくっていくことに向けられていた。これは昨今の能力主義的教育観とは異なる点であり、人間の見方、目指すべき教育、あるいは学習の在り方について改めて考え直す必要があるのではないかと考えさせられるものであった。

第三に、教育方法が大変多岐にわたる一方で学生同士のグループ学習、あるいは授業外学習が必ず必要であるという共通点も見られた。また、ゼミが学校内だけでなく、学校外へ赴き、他大学の学生、高校生、社会人、世界や地域と出会い、学ぶという点も学問分野に関わらず大切にされていた。

第四に、学生の意欲を引き出すための工夫が随所でされていた。ディベートやコンペティションのような競争原理の活用や、目標設定と達成報酬によるモチベーションの向上など、学生の学習心理を意識した取り組みが多くみられた。

第五に、学年を越えた人間関係の重要性が語られた。学部学生の先輩後輩関係、あるいは大学院生やＴＡの関わり、卒業生とのつながりなど、授業をとっている学生間だけでなく、年齢を越えた関係性の構築が学生の成長にとってプラスであり、ゼミで活用される重要な教育資源なのである。

パネルディスカッション

以上の報告整理をもとにパネルディスカッションを行った。議論の題材は予め分科会参加者から集まった質問や意見を参考にした。また議論を分かりやすく展開するため、「input（どのような学生がゼミにくるか）」「throughput（どのような環境で学ぶか）」「output（どのような結果や成果が生まれるか）」の３段階に分けて進めた。ディスカッションのコーディネーターは引き続き西野が担当し、パネリストは実践報告者３名とした。以下は議論の内容を要約して記載している。

（１）input について

Ｑ．ゼミが必修になっている場合、モチベーションの低い学生はこないか。

Ａ．志望度の低い学生はやってくるが、様々な活動を提供することで、自分なりにできることを見つけ、それなりにやる気を出していく。また、彼ら自身の興味がどこにあるかを探り、そこからゼミのテーマにひきつけて論文を書かせるといった工夫もし得る。加えて、志望度の低い学生が必ずしもゼミ教育を阻害するとは限らず、逆にゼミに多様性をもたらし、学生同士の学び合いを深める結果につながることもある。

Ｑ．定員をオーバーした場合は、どうやって落とすか。

Ａ．志望動機と自己ＰＲがしっかりしているかどうか。素直そうな学生、その気になりやすいような学生を採用するようにしている。こっちが言っていることに騙されてくれるというか、騙されてみようと思ってくれる学生を選ぶ。

定員をオーバーしても希望した学生を全員とらなければいけない場合もある。その場合は、早め早めに期限を切って論文を書かせていくようにする。早めに方向修正をさせることで、全員が論文を書き切れるように工夫する。

（２）throughput について

Ｑ．ゼミが講義になってしまうことはないか。授業時間中の教員の役割は。

Ａ．ある。学生が勉強したくないときに（狙われて）「先生、サッカー勝ちましたね」と話を振られ、１時間ぐらいその話をしてしまったことが昔ある。今は、学生に話をさせるようにしている。学生が自分のテーマを持っていることが前提なので。一方基礎ゼミでは、なかなか学生が口を開いてくれないことが多いため工夫をしている。例えば３つのグループに分け、発表グループ、質疑応答グループ、質疑応答評価グループという形で進める。しゃべらざるを得ない環境をつくると、学生は無理やりでもしゃべってくる。とにかく学生にしゃべらせる工夫をする。教員の役割は（学生の）役割を決めること。基本は話さないのが理想的かなと思う。ただ学生も教員の意見を求めているところがあるので、短時間私はこう思うとフィードバックすること。

原書講読で「ひどくあやしげにきちんとしている」なんて珍妙な訳をする学生がいる。「これは関係代名詞だ」なんだと講義を始めてしまいそうになるのだが（それは避けたい）。色々な活動を同時並行で走

らせているから、それについて話させる。必ず学生が話せるネタをふる。講義は講義でやっているから、ゼミは違うようにしたいので、同時並行でやっている活動について話してもらうようにしている。

しゃべっているのは５％未満。事務連絡みたいなことだけ。あとはゲームで学生が話しているので。フィードバックはＴＡがしたりしますが、それが間違っているとフォローしたりする。あとは負けたチームのいいところを見つけて褒めたりしている。

Q．褒める、叱るのスタンスはどのように考えて指導しているか。

A．褒める、叱るの二分法ではないのではないか。面白がるということはする。褒めるときも、叱るときも真面目に伝える。真面目に伝えるとは、根拠を示して対応するということ。学生にうそは通用しない。

Q．授業外学習は皆やってくるのか。講義ではやってこない学生も散見されるが。

A．やらざるを得ない雰囲気がある。先輩を裏切れない、他大学とのディベート等では迷惑をかけたくないと思う。やっているうちに探究心も出てくる。最終的に先輩はこんな論文を書いている、あるいはこういうところに就職して活躍しているということがわかると、自分がやっていること（膨大な授業外学習）は無駄じゃないと分かる。

また、教員のスタンスも重要である。自分（学生自身）が掲げたテーマなのだから、教員よりも詳しくなければならない。僕（教員）に教えてねと言う。そのテーマについてどの学生よりも教員よりも詳しくなければならないというスタンスで臨む。

Q．低単位者・成績不振者に対する対応を教員としているか。

A．個別に本人が相談にくれば、徹底的にやる。実際の例としては、第一志望じゃなくて、単位も取れていなくて、ゼミでもなかなか入り込めずにいる、という状況の学生。ロースクールに行きたいと言っていたので、頑張った。最終的には卒業できた。来ればフォローするけど、来なければどうしようもない。気になる学生には何気なく声掛けをしてフォローするぐらいのことをする先生はいる。ただし、ほとんどの教員は教務任せではないか。

教務から連絡が来て、低単位者・成績不振者に対する面談をルール化している場合もある。教員が面談をした結果を教務に伝え、両者で対応していくというやり方がある。

（３）output について

Q．卒業論文の単位と評価の方法についてはどのような実態があるか。

A．卒業論文を必修とするかどうかも含めて実態は大学によって様々である。必修でない場合も、卒業記念として学生主導で作ることがある。その場合は院生が内容をチェックする。卒論に対する評価は、概ね教員の裁量になっており、教員の中の暗黙の評価基準で採点されている。卒業論文を提出しなくても卒業できる場合もあるが、卒業論文を出さなければゼミという共同体からは追放するといった措置をとる場合がある。

Q．学生はゼミで成長したのか。

A．成長したかどうかは見方によって違うので難しいというのが率直な感想。成長したと思いたい。学生が言ってくれるのは、卒業の時「先生のゼミにはいらなければ大学に行っていなかった」ということはある。ゼミで何かを自分で問題設定してデータを集めて分析してというプロセスを経て、自分もできるかなと思うという記憶は残るのではないか。また、色々な人と出会うことが成長につながる。

大部分の学生は人生が変わったと（私は）思っている。ゼミのたかだか２年半の時間で人間変わらないとも思うが、様々な関係の中で変わるのかもしれない。ひたすらボールをなげて、どれかはあたるかなと思ってやっている。

研究の知見を紹介すると、共同体意識が高い学生は汎用的技能の成長実感値が高い。また教員が熱心に指導するほど、共同体意識が高まり、汎用的技能の成長実感値も高まるという伏木田の教育工学研究成果がある。また西野の質的研究では、課題の質と、関係性の質が学習共同体の形成に繋がって汎用的技能の修得や関係性の向上につながるということも明らかにしている。

分科会を終えて

パネルディスカッションの後にグループワークを行い、分科会を終了した。現場経験ゆたかな教員３名の実践報告と、参加者の質問や討議により、ゼミ教育の意義や学習成果を高める具体的なヒントは多く挙げられた。これらをまとめることは非常にむずかしいが、強引に２つにまとめる。

第一に学習成果という概念の難しさである。教員は単に汎用的技能を身につけさせたいと願ってゼミナール教育を展開しているとは言い切れない。むしろ物事の見方、考え方、物事に対する姿勢を多用な活動の中で養おうとしている。その中で学生は「変化」するものの、それを「成長」と捉えるかどうかは、何を正解とするかによって異なるという教員自身の教育に対する謙虚な姿勢が見受けられる。自分は学生にどうなってほしいのか、そのために一人ひとりの学生とどのように向き合えばいいのか、絶え間ない試行錯誤の連続がそこにある。

第二に人間関係の重要性である。この人間関係は教員―学生間もさることながら、先輩―後輩の関係性、そして、学外者との関係性である。何をもって成長とするかの判断が難しい中、それでも確実に彼らを変化させる要因として、多様で豊かな人間関係が挙げられた。教員は場を提供し、彼らに役割を提供しているにすぎず、様々な場や役割を活用し、時には褒め、叱り、コメントし、彼らの変化を見守る存在が、ゼミにおける教員である。この関係性は、卒業後も院生、あるいは卒業生として続き、ゼミ教育に新しい豊かさを加えるのである。

最後になるが、日々の業務や教育・研究活動が大変ななか、この日のために準備をし、拙い進行にお付き合いいただいた３名の報告者の先生方、ならびに数ある分科会の中から第５分科会を選び参加し、意見を述べてくださった参加者の皆様に御礼を申し上げたい。短い時間ではあったが、本企画が報告者ならびに参加者の皆様にとって、何かしら価値あるものであったならば幸いである。

以上

第５分科会コーディネーター
西野　毅朗

学部ゼミナールでいかに学習効果を高めるか
能動・共感・感興を目標に（法学部の事例）

同志社大学　法学部　教授　　高杉　　直

学部ゼミナールでいかに学習効果を高めるか
能動・共感・感興を目標に（法学部の事例）

高杉 直（同志社大学 法学部・教授）

FDフォーラム（2017年3月5日）

同志社大学
Doshisha University

II. ゼミの目標と実践内容

- テーマ：
  国際ビジネスに関する法律問題
- 2.1　目標
  ① 能動：主体的な行動
  ② 共感：他者への思い遣り
  ③ 感興：学問への関心の惹起

Doshisha University

II. ゼミの目標と実践内容（続）

- 2.2　実践内容
  ① 能動
    ・インセンティブ
      → 勝ち負け（ゲーム形式）
    ・個性に応じた対応
      → グループワーク（チーム対抗戦）
    ・成功（失敗）体験
      → 他大学との合同ゼミ

Doshisha University

II. ゼミの目標と実践内容（続）

- 2.2　実践内容（続）
  ② 共感
    ・読書紹介会
    ・懇親会
    ・その他の課外活動
  ③ 感興
    ・外国法に関する研究報告
    ・国際投資ゲーム
    ・卒業論文

Doshisha University

III. 他の教育プログラムとの連携

① 学生参加型の外部のコンペティション
  ・国際商事仲裁の世界大会（英語）
  ・大学対抗ネゴシエーション大会
② 大学院の教育プログラムとの連携
  ・企業法務プロフェッショナル育成
  ・外国大学とのダブルディグリー
③ 多言語・多文化の理解
  ・海外サマースクール
  ・国際シンポジウム・ゲストスピーカー

Doshisha University

IV. 学士課程における課題

① ゼミの目的は何か

② ジェネレーションギャップ

③ ゼミの運営方法

Doshisha University

実践報告　いかにして学生から声を引き出すか

京都橘大学　文学部　教授　　安達　太郎

2017年3月5日
第22回FDフォーラム
第5分科会
「学部ゼミナールでいかに学習効果を高めるか」

実践報告
いかにして学生から声を引き出すか

京都橘大学文学部日本語日本文学科
安達太郎

京都橘日文のゼミ系授業とその課題

- 1・2回生
基礎ゼミで日本語学，古典文学，近現代文学の方法論を一通り学ぶ。
- 3・4回生
卒論ゼミでみずからのテーマに取り組む。

《従来からの課題》
- 学生の発言がなく，発表者と教員のやりとりに終始。
- おもしろい発表をしようとする意欲の欠如。

新しい課題：学生の変化

古代	・個人的な興味＝学びの興味＝源氏，漱石，鷗外，…
近代	・個人的な興味＝宮部みゆき，アニメ，… ・学びの興味＝源氏，漱石，鷗外，…
現代	・個人的な興味＝アニメ，ラノベ，…

2014年度　カリキュラム改革

アラカルト方式
- 2回生～
講義・講読系16科目
選択必修16単位以上
- 3回生～
講義・講読系16科目
選択必修16単位以上

賄い付き下宿方式
- 2回生～：
講義系16科目
選択必修16単位以上

1・2回生
言語文化総合演習8科目
必修16単位

言語文化総合演習のねらいと特徴

《ねらい》
- 自由選択型から押しつけ型への転換
- 学外授業を取り込んだ多彩なゼミ運営
- 多様なコミュニケーションの必要性の認識
- 知のネットワークへの動機づけ

《特徴》
- 2コマ連続開講（木曜1・2時限）
- 1・2回生合同，基礎クラス横断的なクラス編成
- 文学，語学，歴史，地理を総合したコンテンツ

言語文化総合演習の実践例

《テーマ》
「〈声〉を取り戻す」。グループワークやさまざまなプレゼンによって，考えて声を発するという行為を持続させる。

《コンテンツ》
タスク1：ビブリオバトル
タスク2：歌合
タスク3：群読
タスク4：リレープレゼン

タスク1：ビブリオバトル

- ビブリオバトル＝知的書評合戦@ビブリオバトル普及委員会
- 公式ルールに従って実施。おもしろいと思う本を紹介する5分のプレゼンののち，投票を行い「チャンプ本」を選ぶ。
- プレゼン資料を用意することは禁止。

↓

あたふたしたトークの意味を実感させる

タスク2：歌合

- 歌合はグループによる歌（＝短歌）合戦。
- 歌題を含む短歌作品によって勝敗を競う。グループごとに作戦会議を行って攻撃方法を相談し代表者が意見陳述のプレゼンを行う。最後に審判（判者）チームが合議の上勝敗を決める。

↓

批評的なコミュニケーションの試み

タスク3：群読

- 短歌や近代詩などのテキストをグループ全員で声として表現する。解釈や分析は一切なし。
- グループワークの中で，漢字の読み，フレージング，休止，強弱などに関して統一を図る。

↓

人間の体が発声器官であることを体感させる
声をあわせることの難しさと快楽を経験させる

タスク4：リレープレゼン

- 言語文化総合演習の総決算。グループ単位で調査報告のプレゼンを行う。
- 2016年度前期のテーマは「清水寺」，後期のテーマは「日本文化にとっての〈みちのく〉」。
- グループのテーマに対してメンバーの人数分のサブテーマを設定。1人につき4分間の報告を連続して行い，全体としてまとまった発表とする。

↓

プレゼンに対する意識の変化を確認

受講生の声（1）

《ビブリオバトル》

- 発表は苦手だったが，自分の好きなものを紹介できたので，「もっと話したい」と思えた。
- 話しているうちに意識していなかった魅力が分かってきた。

《歌合》

- 褒めるのではなく貶すというのが意外に楽しかった。
- 人の作品を批判することをしてこなかったので戸惑ったが，グループで協力して「勝ち」の判定をもらったときはうれしかった。

受講生の声（2）

《群読》

- 同じ作品を読んでも区切りや強調する場所が違っていて，聴くのが楽しかった。
- 1人1人がきちんと声を出してぴったり合わせると達成感があるうえに楽しかった。

《リレープレゼン》

- 聞いている人が反応してくれると気分がよくて，発表は聞いている人がいないと成立しないのだと心から思った。
- 他の人の発表を聞いて，吸収したいなと思ったことがたくさん見つかった。

ゼミナール活動を通じた「出会い」の場の「演出」
―「不安」と「不満」を抱える学生を前に―

高崎経済大学　経済学部　教授　　矢野　修一

第22回FDフォーラム第5分科会「学部ゼミナールでいかに学習成果を高めるか」
（2017年3月5日、稲盛記念会館）

ゼミナール活動を通じた
「出会い」の場の「演出」
―「不安」と「不満」を抱える学生を前に―

矢野修一（高崎経済大学教授／広報室長）
E-mail: yano@tcue.ac.jp

はじめに①

・船曳建夫による珠玉の「大学ゼミナール論」
［船曳2005］：大学におけるゼミとは……

・もっとも大学らしい知の形式
・「堅い話は抜きにして」つきあうのでは「ない」仲間
・永遠に問答をやりとりする仲間
・先生はいなくてもゼミは続く
・ゼミとは、大学のある時期、ある教室、という特定の時間と場所にあるのではなく「持続するバーチャルな時空」の中に生きていくもの

はじめに②

・学部ゼミナールに必要な「時間」と「お金」：

・時間；「週1コマ」の時間割上の活動だけで「成果」をあげるのは難しい。課外活動をいかに充実させるか。「単位制」の実（必須の自学・自習）をどうあげるか。

・お金；様々なゼミ活動には授業料以外の金がかかる。活動費をどう捻出するか。

・時間とお金がかかっても、それに見合う「成果」をあげられればよし。

はじめに③

- 必ずしも第1志望ではない大学に入った学生に対し、ゼミナール活動を通じ様々な「出会い」の場を用意し世に送り出してきた26年の経験の一部を披露［矢野 2010］。
- 報告者：1991年4月の着任後、高崎経済大学経済学部の「必修」のゼミにおいて2017年3月までに24期、320名以上の学生を指導。
- 専門は世界経済論・開発経済論・経済思想。

1. 公立大学法人高崎経済大学について①

- 1957年に経済学部経済学科の単科大学として高崎市が創設（2011年4月、法人化）。
- 2017年創立60周年：現在は2学部・2研究科体制。
- 全国型公立大学：全国入試（9カ所）展開。学生の7割以上が群馬県外出身者。
- 経済学部：定員480名のうち240名が公立大学中期日程（前期140名、推薦100名）。cf. 地域政策学部：420名定員。
- 創立以来、伝統的に、初めての1人暮らしの「不安」、第1志望ではない「不満」を抱えながら入学する学生が多い。

1. 公立大学法人高崎経済大学について②

- 高崎経済大学経済学部1年次：「日本語リテラシー」「英語」「市場と経済」「企業と会計」必修。
- 経済学部「専門科目」としてのゼミ（演習）：2年次後期の「基礎演習」、3年次「演習Ⅰ」、4年次「演習Ⅱ」が「必修」。すべて専任教員による。1ゼミの定員は14～15名。
- 正規カリキュラムは学年別だが、時間割以外の様々な行事（合宿、コンパ等）を学年合同でやっているところが多い。

1. 公立大学法人高崎経済大学について③

- 大学から専任教員に一律支給される「個人研究費」：年間54万円（このほか、消耗品費2万円、一般財団法人「高崎経済大学後援会」から年間4万円）。個人研究費・後援会研究費はゼミ合宿・ 調査・合同ゼミ・学会参加などでゼミ生を引率する際の交通費・旅費に充てることが可能。
- 大学の「奨学奨励費」（年間予算300万円）で学生の学会発表、インターゼミナールブロック大会・全国大会参加費用補助（ただし体育会・文化サークル等の全国大会参加費なども奨学奨励費予算から支出）

2. 高崎経済大学矢野ゼミナール

- カリキュラム上の時間割：基礎演習（木曜4限）、演習Ⅰ（金曜4限）、演習Ⅱ（木曜5限）。
- 「延長」あり「課外活動」ありの「ガチゼミ」。
- 時間割外で学生がグループで様々なテーマに取り組む（特に3年生）。
- 大学から半径1キロ以内に多くの学生が住んでいることの利点（いつでも、どこでも、ゼミができる）。
- 予習・自習・グループ研究は必須。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【正規時間割におけるテキスト輪読】

- 専門書の輪読：基礎演習、演習Ⅰ・Ⅱとも。演習Ⅰ・Ⅱは時間延長あり。
- 演習Ⅰではゼミ第3期生の時代から「原書講読」

◇2014年度（23期）
David Held and Charles Roger, eds., *Global Governance at Risk*, Polity Press, 2013.
◇2015年度（24期）
David Held and Charles Roger, eds., *Global Governance at Risk*, Polity Press, 2013.
◇2016年度（25期）
Eric Helleiner, *The Status Quo Crisis: Global Financial Governance After the 2008 Meltdown*, Oxford University Press, 2014.

- 議論を通じ『日本経済新聞』購読の必要性自覚。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【TOEICチャレンジ】

- 高崎経済大学経済学部では1年次・2年次9月のTOEIC必須：ゼミでは3年次5月の受験を必須とする（「ゼミ基金」から受験料補助。「ゼミ基金」については後述）。
- ゼミ内での優秀者表彰：「手の届きそうな」目標設定。2年次600点以上、3・4年次640点以上で 「ゼミ基金」から受験料キャッシュバック。730点以上で担当教員ポケットマネーによる（回らない）寿司屋接待。860点以上で、もう1回！

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【就活文庫「シリーズ1／シリーズ2」】

- まずは読書の習慣形成。
- 「働くということ」「自分が成長するということ」「仕事のやりがい」「労働環境」などを考えるヒントになるような本を集め、回し読みする。小学校の学級文庫のノリ。
- 就活文庫「シリーズ1」：2年次後期15回の日程で回し、毎週1冊読む。 各自の感想／コメントを綴った「読書ノート」も順番に回す。「共通の話題」作り。
- 就活文庫「シリーズ2」：「シリーズ1」と同様のやり方。3年次前期15回の日程で。
- 就活文庫は個人研究費でそろえる。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

就活文庫「シリーズ1」の例

- ①デール・カーネギー『人を動かす』（特装版）創元社、2007年。
- ②佐野眞一『あんぽん－孫正義伝』小学館、2012年。
- ③大江英樹『経済とおかねの超基本1年生』東洋経済新報社、2015年。
- ④アレックス・ロビラ他『グッドラック』ポプラ社、2004年。
- ⑤岩崎夏海『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』ダイヤモンド社、2009年。
- ⑥斎藤孝『「できる人」はどこがちがうのか』ちくま新書、2001年。
- ⑦古市幸雄『「1日30分」を続けなさい！』だいわ文庫、2010年。
- ⑧池井戸潤『下町ロケット』小学館、2010年。
- ⑨石渡嶺司『大学の思い出は就活です（苦笑）－大学生活50のお約束』ちくま新書、2012年。
- ⑩斎藤兆史『英語達人列伝』中公新書、2000年。
- ⑪喜多川泰『「また、必ず会おう」と誰もが言った。－偶然出会った、たくさんの必然』 サンマーク出版、2010年。
- ⑫苅谷剛彦『知的複眼思考法』講談社＋α文庫、2002年。
- ⑬藻谷浩介ほか『里山資本主義－日本経済は「安心の原理」で動く』角川oneテーマ21、2013年。
- ⑭笹山尚人『労働法はぼくらの味方！』岩波ジュニア新書、2009年。
- ⑮山崎亮『コミュニティデザインの時代－自分たちで「まち」をつくる』中公新書、2012 年。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【高大コラボゼミ】①

- 高崎経済大学附属高校（2014年度よりSGH指定）3年1組と矢野ゼミ3年生が行う合同ゼミ。大学生がチューター役となり、6グループに分かれて「日本企業の海外戦略」 のケーススタディ。大学生2～3名、高校生7～8名のグループ形成［矢野 2013a/b］。
- 大学生にとって課外学習（前期において2週に1度。火曜5限）だが、高校生に「教える」以上、言われずとも十分に準備せざるを得ない（カッコいい憧れのお兄さん・お姉さん！）。就活前の企業研究の機会ともなる。
- 2010年度より高大連携で日本企業のケーススタディ：大企業OB（NPO組織）に仲介依頼。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【高大コラボゼミ】②

- 「日本企業の海外戦略」研究の中で、日経新聞社主催「円ダービー学生対抗戦」に参加。 為替レート研究を通じ、高校生の国際経済への関心を高める。大学生が高校生を導く。「憧れの先輩」像が求められる大学生。
- 4ヶ月に及ぶ中期経営戦略などの分析のあと、8月に企業本社訪問／インタビュー。9月に高校生が数百名の観衆の前で成果発表会（ゼミ3年生がバックアップ）。
- 「高大コラボゼミ」は、大学生にとって、高校生、高校の先生、企業OB、企業人との「出会い」の場。9月の成果発表会後は、大学教職員、高校の先生、企業OBと飲み会。「先輩」からの様々なアドバイス。
- 「高・大・産・老」連携としての「高大コラボゼミ」。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【高大コラボゼミ】③

《直近3年間の高大コラボゼミ企業訪問先》

◇2014年度（23期）
日立製作所　KYB（カヤバ工業）　コクヨ
全国農業協同組合連合会　清水建設

◇2015年度（24期）
トヨタ自動車　三菱重工　日本水産
三井物産　資生堂　東燃ゼネラル石油

◇2016年度（25期）
住友重機　日本航空　アサヒビール
三井海洋開発　三井住友建設　コマツ

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【他大学とのディベート・合同ゼミ】

- 3年後期に取り組む。他大学とのディベート・合同ゼミに向け、時間割以外の時間で共同研究。他大学生相手に恥をかきたくなければ準備に励まざるを得ない。
- 2016年度は、東京大学、大分大学、下関市立大学と「Brexitがイギリス経済に与える影響」「今後10年間における仮想通貨の普及状況」などをめぐって。
- ディベート・合同ゼミのあとは、合同で飲み会。他大学の先生、学生との「出会い」。
- 東京、京都などへの交通費・旅費の一部は「ゼミ基金」から支出（2016年度は、1人2万3000円）。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【合　宿】①

- 春合宿：榛名湖畔の温泉「ゆうすげ」において、新年度開始直前に新3年・4年で行う。新年度に向けたオリエンテーションと懇親会を兼ねる。専門書の輪読（2016年はエリック・ヘライナー著『国家とグローバル金融』、2017年は吉川洋『人口と日本経済』）。
- 夏合宿：森に囲まれた倉渕町のログハウス「クライン・ガルテン」において、3年・4年合同で行う。後期の合同ゼミ・ディベートに向けた準備と懇親会を兼ねる。専門書の輪読（2016年はダニ・ロドリック著『グローバリゼーション・パラドクス』）。
- 夏合宿バーベキューの準備は3年生全員で。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【合　宿】②

- 追いコン合宿：倉渕町「はまゆう山荘」で行われる4年生の追い出しコンパ合宿。輪読、勉強なし。2・3・4年生が飲むためだけに泊まる！3次会まで会場あちこちで談笑の輪。
- 上記「ゆうすげ」「はまゆう山荘」の学生の宿泊には高崎経済大学後援会から補助費（1人4000円）が出る。
- 合宿会場には同窓会・後援会のバスで移動可能（格安料金）。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【進 級 論 文】

- 4年進級時に1年間の研究成果を踏まえた「進級論文」執筆。テーマ自由。約1万5000字～2万字。
- 合同ゼミ・ディベートのテーマに関連してまとめる学生が多い。その他、進路に応じて。
- 就活面接のネタづくり（読み手を意識し論理的に文章化したことは喋れる！）。
- 卒論準備・予行演習（一度書いておけば少しは楽？）。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【卒 業 論 文】

- 最大にして最後の課題。テーマ自由。約4万字。同期生の論文とともに矢野ゼミ卒業論文集『経済学研究年報』にまとめ、印刷・製本。
- ゼミ3年次より卒論印刷・製本費を積み立て（1人合計4万8000円）。高崎経済大学経済学会から1ゼミ5万円を上限に卒論集の印刷・製本費補助金支出。
- 『経済学研究年報』はゼミ1期生から存続。保護者（＋祖父母？）にも郵送（最高の広報活動！）。
- ゼミの2年・3年にも配り、卒業時の「到達目標」を具体的に自覚させる。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場
図書館で閲覧できる各ゼミの卒業論文集

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【ゼミ卒業生による就活サポート】

- 3年次後期末試験終了後、ゼミ卒業生有志により東京で行われる。エントリーシート作成指導、模擬面接など。ゼミ活動を通じたタテ・ヨコの濃密な関係の積み重ねがあってこそ。
- 「受けて忘れず、施して語らず」。
- 模擬面接の会場は東京八重洲界隈の貸会議室を利用。費用は「ゼミ基金」で賄う。
- ゼミ生の就職実績にもつながる：ゼミの最低限の目標「食いっぱぐれを作らない！」

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

ゼミ卒業生直近3年間の進路

◇2015年3月卒（22期）
日本銀行　岩手銀行　群馬銀行　東和銀行　日本年金機構　新潟県労働金庫
あいおいニッセイ同和損保　帯広信用金庫　アステラス製薬　大正富山医薬品
EXCEED　THK　日本発条　前橋市役所　東京大学大学院総合文化研究科

◇2016年3月卒（23期）
北海道銀行　水戸信用金庫　中央労働金庫　宮城県信用保証協会　JA共済秋田
大陽日酸ソリューション　ココカラファイン　マイナビ　税理士法人あさひ会計
山田ビジネスコンサルティング　栃木県庁　前橋市役所　関東信越国税局
中小企業基盤整備機構

◇2017年3月卒（24期）
日本銀行　北日本銀行　筑波銀行　大垣共立銀行　東日本旅客鉄道
SMBC日興證券　外山産業　塩野義製薬
東京大学大学院総合文化研究科　一橋大学大学院商学研究科
慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【ゼ ミ 基 金】

- 矢野ゼミ卒業生からの寄付金。現役ゼミ生の様々な活動を支援するために使う。
- ゼミ文集『梁山泊』（年1回）を卒業生にも送付。文集は寄付金（一口3000円）集めの手段でもある。
- 2年に1度、ゼミ卒業生、現役生が一堂に会する「ゼミ総会」もゼミ基金の収入源となる（パーティー会費を少しずつ浮かせてお金を捻出）。同伴者（配偶者・子供・婚約者など）はゼミ総会の会費無料。2015年第11回のゼミ総会は約130名が参加。

3. 矢野ゼミにおける「出会い」の場

【ポシビリズム（possibilism）研究会】

- 矢野ゼミの大学院進学率（約15%）は学内平均をはるかに凌駕。卒業生には大学教員・研究者も多数。
- 1998年から矢野と卒業生との勉強会実施。研究報告、専門書輪読、翻訳など。現役生も任意で参加。研究者以外の企業人も参加。モデルとしての「背広ゼミ」（都留重人、柴田徳衛ら大御所による）。
- 成果として共訳の公刊：ハーシュマン『連帯経済の可能性』、ヘライナー『国家とグローバル金融』。
- 卒業生によるスピンオフ研究会：日本銀行、全国銀行協会、金融庁などに勤務の卒業生らによる「決済制度ゼミ」など。先生抜きでも「ゼミ」は続く（船曳建夫の言葉！）。

おわりに～3つの「出会い」①

「人」との「出会い」

- 全国各地からやってきたゼミ同期生、先輩・後輩、企業人、他大学の教員・研究者、高校教員、高校生など。
- 「山と山は出会わないが、人と人は出会う」（スワヒリ語圏の諺）
- 様々な刺激、示唆、アドバイス。
- 矢野ゼミに入らなかったら、けっして出会わなかったであろう人たちとの「化学反応」。
- 「触媒」のはずが指導教員も「成長」

おわりに～3つの「出会い」②

「新しい考え方」との「出会い」

- 原書をはじめとするテキスト輪読、新聞/雑誌記事・論文渉猟、プレゼンテーション、ディベート、論文執筆などを通じて、未知の知識、情報（、人生観！職業観！世界観！）を得る。
- 「メガネ」が違えば、「見える世界」が違ってくる。

おわりに～3つの「出会い」③

「自分」との「出会い」

- 様々なゼミ活動、ゼミでの「出会い」を通じ、それまでは考えられなかったような「自分」と出会う。
- 「受験トラウマ」と「偏差値幻想」の超克。
- 入学時、「不安」と「不満」を持っていた学生が様々な「出会い」によって「成長」する場面にたびたび遭遇するのは「教員冥利」につきる。

主要参考文献

- 船曳建夫（2006）『大学のエスノグラフィティ』有斐閣。
- 矢野修一（2010）「地方公立大学にとっての卒業生の重要性－ゼミを媒介としたネットワークの形成」高崎経済大学附属産業研究所編『地方公立大学の未来』日本経済評論社。
- 矢野修一（2013a）「高大コラボゼミの相乗効果－双方向的高大連携の試み」高崎経済大学　産業研究所編『高大連携と能力形成』日本経済評論社。
- 矢野修一（2013b）「高大連携と能力形成の展望」高崎経済大学産業研究所編『高大連携と能力形成』日本経済評論社。
- アルバート・O・ハーシュマン（2008）矢野修一ほか訳『連帯経済の可能性－ラテンアメリカにおける草の根の経験』法政大学出版局。
- エリック・ヘライナー（2015）矢野修一ほか訳『国家とグローバル金融』法政大学出版局。